養笠雨談

中

15
1268
2

1268
2
遠門
帝
2462
2

蓑笠雨談 初編 巻之二

東都 曲亭馬琴著

○吉野が傳 并 蟹の盃れ圖説

七月十七日遊君うゝ望ぶ蟹の盃ろんと。香果老人ゟ就く依野氏を訪ふ。依野氏ハ茱庵と号京両替町二條下ル処ゟ家ーてうゝを業とそこの人うゝ望ぶ夫なりる庆屋紹益の孫なり。余談話の法仏で父紹の傳をとゝべる人の云。紹父紹益が家ハ智恵小路上豆賣りあり。和尚をたゝてて貞徳老人と友なり。亦蹴鞠茶事ふゝうく。折柄ハ高貴れ席上ゟ出けるゟう少伝ふ。吉野ハ寛永八年六月廿二日没て紹を紹益里となりよりう吉野を死ぬの山ゟ葬ーて紹益ゟれその時哀悼の歌なりう。ーゝ没ーてゝるゟ後ゟ浪速の

某氏の女を娶りしがとしあれども子なく。紹益七十三才のとし妾に男子出生せり。今の主人の父紹圓是なり。紹圓も鞠を好しとなり。紹圓五十餘才のとき主人出生す。主人も齢六旬にちかゝるべし。寛永年中より僅に三世なれ長命にしていとめでたき家なり」亦彼人の墓に。紹益が菩提寺は内野新地立本寺（日蓮宗）なり。此寺そのかみは今出川寺町にありしが。そのち御用地となりて今の地所に引うつりし時。改葬して墓石も建なほし䄇なる石面を紹益とよし野が法名を二行に彫つけたり。紹益は八十一才にて没しぬ

古継院紹益　元禄四年十一月十二日

本融院妙供　寛永八年六月廿二日

本融院はよし野が法号なり。これをもて數ふれば吉野没年は紹益廿才の夏なりき。さればよし野紹益が婦となりて程なく。いとはやく

て身まかりしなるべし。うべなり紹益が玉をうしなへるの眼前の花を吟じてもしるべし。箕山が大鑑に云ク。（箕山は貞徳門人両巴巵言好色大鑑などあらはしたる人也）六條の揚屋林家の肥前益子が禿林弥吉野となる云云。寛永十八年六條柳の馬場より今の三筋町へ引うつれば嶋原の廓はよし野没して十年のちに成就せり。或人の説に。紹益よし野を根引せし時父の不興をうけて下京に廬をもとめて夫婦住けり。父一日他へ出ゆきしかへるさ雨ふり出しければ路傍の家に雨やどりして晴間をまちけるに炉に釜をかけて閑雅なる人の廬とみえければ立寄て湯を所望しけり。女房のいとうるはしきが此方へと請じて茶たて出しぬ。その風流なる事より菜は手まへなどこゝろ又なきされば いとゞ感じおもひせられ立かへりて次の日あるじの人に語りければ それこそ令郎紹益が妾なり。

その家へつ負け隠宅ふと告。父そでめく志りくその奇偶を感悟し。遂ゑ紹益が勃氣を思ふ。吉野を引ろうくめいへせ〜とぞ。程をさらぬ下京ゑその子の志が居るを思ぶるを。そのあろ豪冨なりーとさるべ〜といろう。れ家ゑ吉野が書るめのろさぐ〜ありしが。或へ人の所望ふそのせ。赤い葦馬の難ゑ係く焼失し。今へ一ろれ反故もかーそく。主人二代めの吉野が文をろり出くそをろ。紋所の印へ彩のごく。一巴のうちふさ〜ろの花ゑく。ゑ迹も又ろなり。遊君紋所の印を用ゆーと。ゑ子八千代ちめたるゑ大船ゑいろう。初代ゑ伊ぶ紋へ桜の花ゑや。図祝男女色競馬といふれゑろうこの冊子宝永五年の印本ゑ〜他ちをあ〜ゑさで序ゑ平元の印あれば西鶴が友なりー俳諧師図水が他なるべ〜。それいちゑふ抄出を。

宝永五年二月吉日　柏屋勃興紋

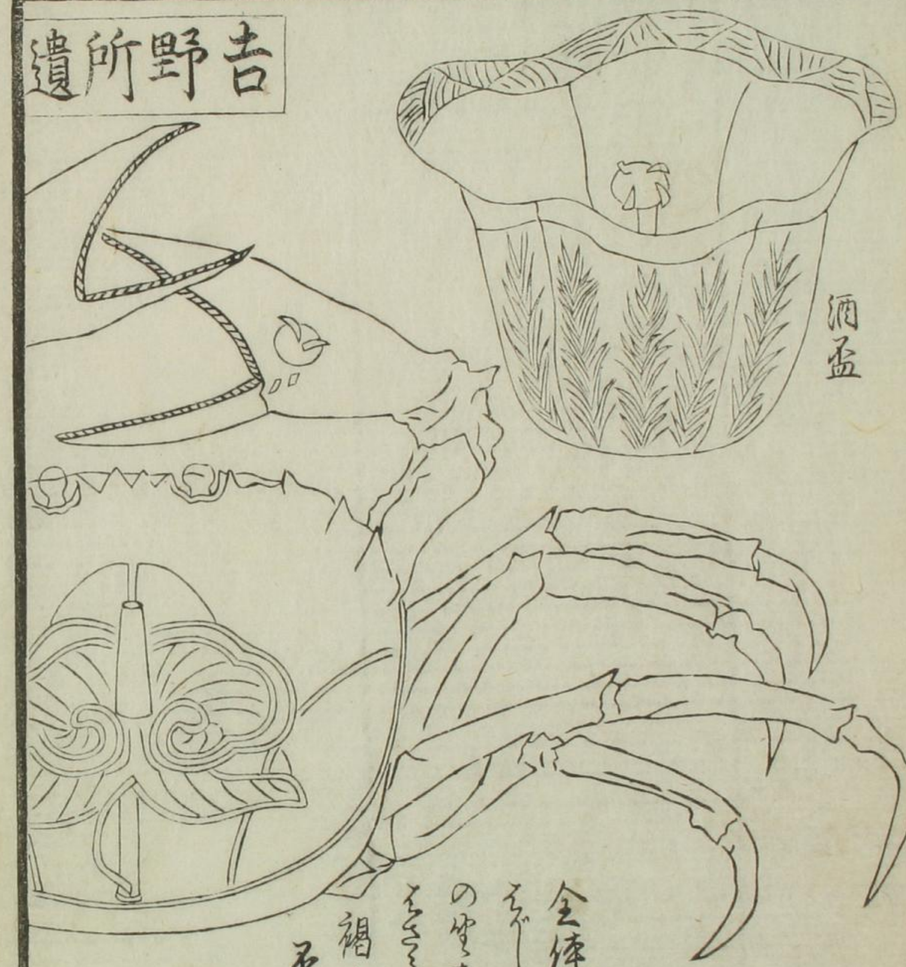
男女色競馬巻之二 自八張至十二張

ちー傾色ゑ名る紀へ葛城定家。そのうち京ゑ吉野。江戸ゑ揚山大坂ゑ利生とく。花も実も夫職ゑそゑろ。弟一義を以ゑそゑ位を定めて。琴琵琶を弾し和ゑ反ゑあろをろ世。捻物とく市籠巾芸ゑ珊瑚珀の弦じめを吟味し。うーろ帯ゑて五山の位ゑいろうてもそべくふをろゑ皇紙ゑ帝四折ゑして

いにし或ひと濃茶をたうべ。十炷香の會をなしけるが
るものを翫びけるが。そのゝち琴琵琶十炷香などいふ三絃になりぬ。
鎌倉の御所のおもかげ十七小曲から砂をとると端唄にて
ありし。新曲かの紫垣にうちとぢえし拍子丹前に色を増。
中略　吉野座になされば本願寺松へおめとえたる処にて膝
立なりし。たゞしい通へまゐる者にあるぞたんとありて面白し
るすをうかゞふ節せなへといへれも新組自然になりくの玄えぞ。
あるを通る熊野同志も果にあるも椰の
葉といふもの今の目からえは鼠のかふるやうに琴の名なり
せばさても是はいくらもある糸を一附に指は只三本ほど
ひきし。あの名器なりと声をそろへて褒めたてゝけるあれ近
代あげぶしといふは乱れぶしのかまりにて籠の鳥ややうもめやと。

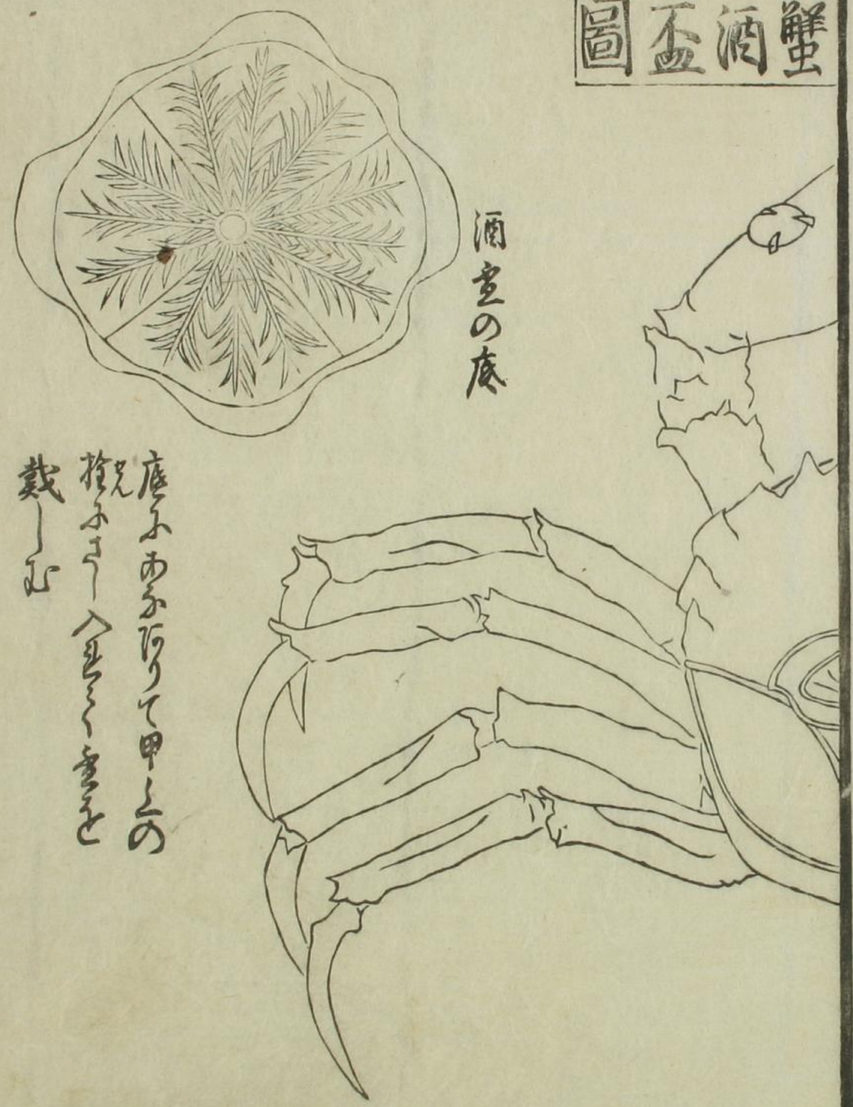
好色大鑑の作者が作まうける濃茶の根元なり。以上色教る
よし神が本書るもの古きまゝなるべし。この作者面のありは見
たるにてあるざめれど。こゝのおまぐれは少し傳へたるにても多かるべし。
投節は坂の隆達といふものぞその名なるし章の箕山が作て
めとかいふ所に余も志るさずしが此冊子を汲くなめて志りぬ。
○中山の色紙よりの海の裂蟹の盃は上野広廊にありしと見
愛玩せしところん今ヶ家に存せるその蟹の盃のことは主人に
請て一覧せるに白銅の如くなれども白銅にもあらぬところ
金の揚そうどありて是をそべて金物細工なり。盤に機関ありて盃
を載ながら席上を横行を盃を納る箱に桃の黒画ありて
琉球画のごとく又古き箱のさしかけ又古雅なありて是琉球製衣の
酒盃なるべし。この日画工成瀬氏おりて席上にありしもの

吉野所遺



全体金色にて甲上に酒盃の紋青色にて中央の上の殊褐色
是も赤きれふあれど

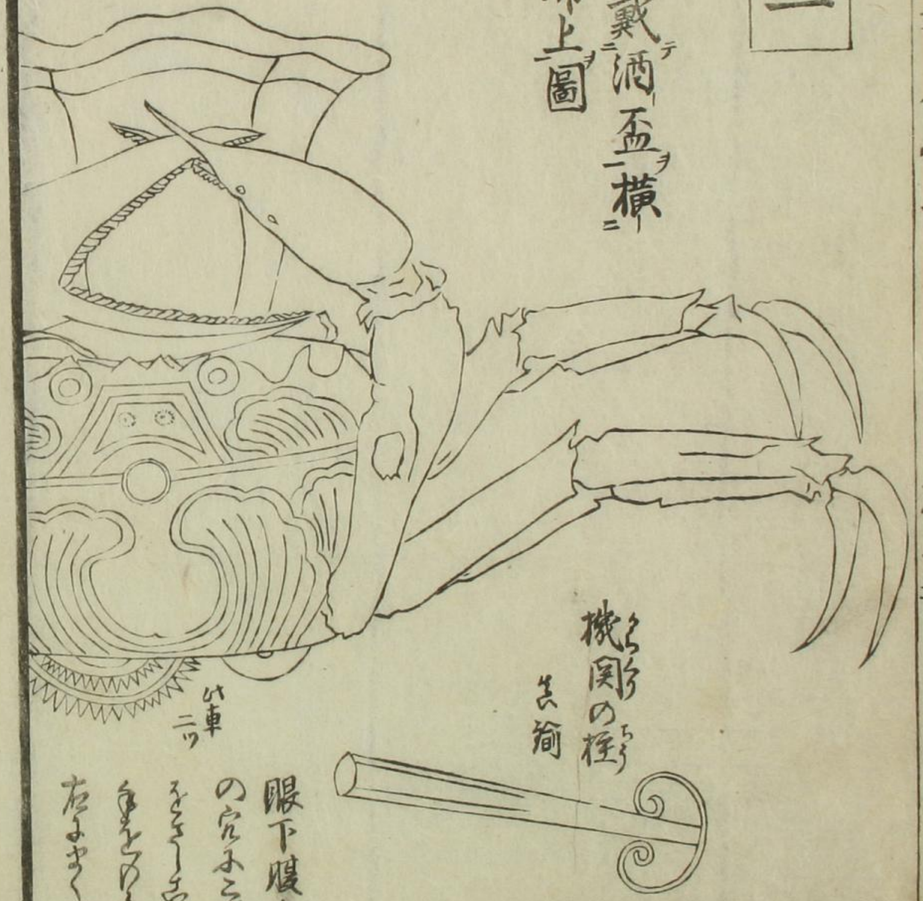
蟹酒盃圖

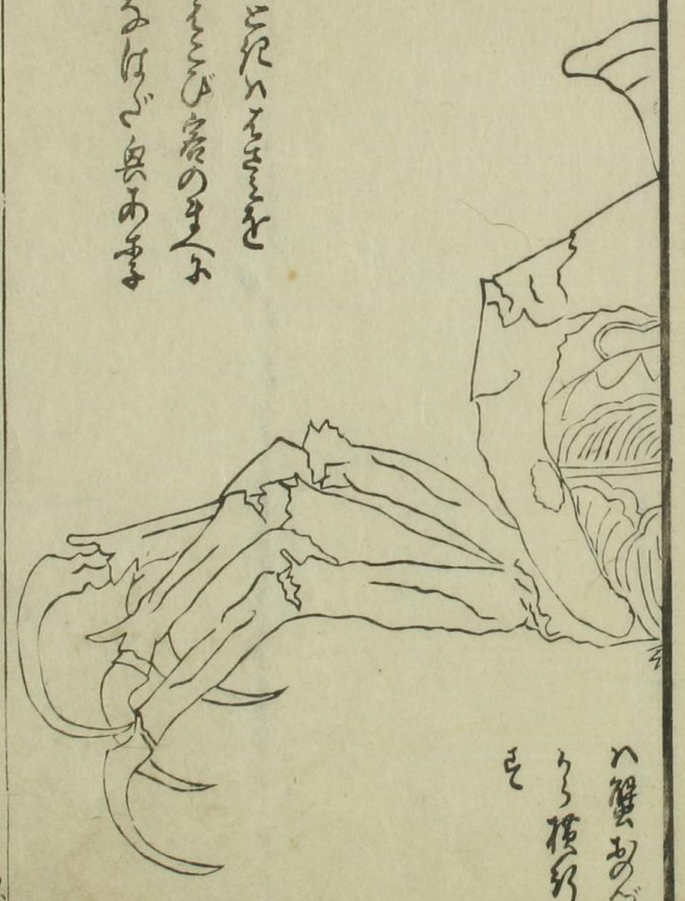


底にあふぎりて甲上の模ふさ〳〵入をくさと裁し心

其二

蟹載酒盃横行席上圖





圖して予がみあるを取。接ぎて予。晉書云畢卓常謂人曰左手持蟹螯右手持酒盃拍盤酒船中便足樂一生矣古人酒中蟹螯を玩ぶをひさし

○烟花城書画展覽の目録

寛政十二年九月廿五日。東山双林寺ふ[illegible]く展覽[illegible]る所の烟花書画の目録。京師の友人より借抄[illegible]たの如し。

書軸 九十九品

毎部以[illegible]物為前見人知焉

一 衛應山 吉野出廓時迷懷文　賀樂狂夫所藏

一 唐士贈東人之文　被招茶[illegible]返　仝

一 恋短冊 蓋所贈八千代短尺 章 画搨桐之紋　仝

一 元政法師恋短冊 在俗之日詠 高尾所咏　仝

一 大橋出廓時贈某生香包和歌　柳巷甫屋、

一 八千代之色帋二幅對　同菱屋、

一 八千代之文　同桔梗屋、

一 二歌深衣詞書和歌二幅對 山脇東洋以文ヲ紀之ヲ　同井筒屋、

一 八千代之筆　同橋屋、

一 大橋之文　同井筒屋、

一 小手巻之一行　大島氏、

一 三國歌川之筆　石河氏、

一 薫之色帋　川端氏、

一 大橋之筆　柳巷桔梗屋、

一 同文　同酸漿屋、

一 別人大橋之色紙　同平野屋、

一 吉原花扇之筆 安永年末書　西村定雅、

一 同短籍　風折氏、

一 伏野紹益之短冊　北邑氏、

画軸 十五品

一八千代泳門番与右衛門自画賛　賀楽狂夫、
一光琳節分夜於花街所画宝船　仝
一游女く古画　仝
一渡邉始興画遊女大江く像　上題大江久書
一大橋自画賛　樋口氏、
一江口妙之画　奔巷菱屋、
一大橋自画賛　樋口氏、
一寄生自画賛　森川氏、
一長歌く画像　吉田元陳画以長歌之文飾之　西村氏、
一長谷川長春游女く圖　吉田氏、
一時代遊女之画　西邑氏、
一濃紫所遺唐画　柳巷菱屋、
一翠雲楼圖　丸山応挙画　仝
一戯涅槃像　紫山御賛　三雲氏、
一柳里恭於木辻指黒画　五十嵐新三郎画以游女某之文飾之　村井氏、

巻軸十一品

一八千代小藤艶書和歌二巻　西村氏、
一八〇筆投節　中山氏、
一二代吉野洞善春画　賀楽狂夫、
一延宝中游女多鑑　柳巷菱屋、
一同別本多鑑　河津氏、
一元文中同多鑑　西邑氏、
一享保中同多鑑　河津氏、
一元文中同色帝短冊多鑑　西村氏、

一　宝暦中同多盃　　仝
一　明和中同多盃　　三雲氏、
一　百花屏風書画姓名　濃紫筆　　柳巷菱屋、

器玩十二品

一　吉野所遺鱶酒盃　　佗野氏、
一　吉野泥像　静右衛門作　　賀樂狂夫、
一　濃紫々煙盒　清勲銘　永忠原書　　仝
一　同黄金笄　　仝
一　同粧鏡　　仝
一　同伽羅筐　　仝
一　同印章二顆　　西邨氏、
一　雛路所遺滋賀都圖硯箱　土佐光芳画　　柳巷橋屋、

一　同花之制札　雛路華　　同角屋、
一　或人於花街常所吹一夜截　　勝山氏、
一　西河院廊饌具　　西村氏、
一　元文中廊門番与右衛門之火鉢　　双林寺長喜庵、

屏風三品

一　和州家隆西華腰屏風　　賀樂狂夫、
一　濃紫所遺百花屏風　　柳巷菱屋、
一　遊女画屏風　　大島氏、

額二品

一　大橋夕佳樓額　　九山正所弥、
一　清人所贈楊柳塘額　　柳巷藤屋、

衣裳三品

一 遊女某く袿衣 光琳画 松竹梅 某生、
一 濃紫之袿衣 賀樂狂夫、
一 二代吉野之帯 三雲氏、

本日不掲千席品物 十二種

一 吉野高尾夕霧之夕色紙 小林氏、
一 堺隆達所書投節 仝
一 長崎遊女之衣裳清人程赤城亦數人寄合書 无名氏、
一 清人所贈遊女某之尺牘 仝
一 圓山應挙画吉野像 田中氏、
一 鯉屋貞柳詠室遊女狂歌 仝
一 八千代大和其角三筆和歌 其角者所追書 无名氏、
一 西洞院廓茶釜 栁巷松屋、
一 茨屋幸舟之鴿杖 同桔梗屋、
一 濃紫之獲身刀 同三文字屋、
一 藤屋吾妻之文 山本与平二條嗣姉小路氏、
一 延宝中傾女手鑑 伊豆藏、

通計六十三品

八千代ハ奥村家の妓なり。名ハ徳子とぞ。一大鑑なりし。傾妓ありて畧ぼ大概が能書なり。人の名妓二歌深衣ハ寛保中ハ名あり。高尾ハ古條の時ありもこの名あるべしいづれも古くぞ。濃紫ハ近世の名妓。元禄中江戸の濃紫あるべしとぞ。その條家陸奥州夕霧。三國の名川ハ高尾人口ハ膾炙せる古妓なり。伴く迷ふ遑あるぞ。亦茨屋幸舟ハ浪花の妓楼なりしも冨たるものなりし。自笑の傾城

竈將軍とゝ冊子いとれを擬〳〵低ろ。こを後のもの只一月のうちゝ持ちうゝ。京の人れ好奉ゝ〳〵。江戸ゝも かゝる物義なる家ゝとゝ。土地ゝ〳〵人煩多なるべし。やゝ。いまゝ炯花ゝ〳〵ゝ展覽會を笑ゝ。只ゝ〳〵ゝ。そこの會ゝあゝゝ粉を隔ゝ〳〵痒を掻がゝ〳〵。おれゝゝ〳〵ゝ。

○大永八年傾城屋の券書

京ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ洛中傾城屋れ券書　紙中竪一尺余横一尺五寸許　これ又二百七十餘年の古書なり

補任傾城屋之事　為

御家恩勢田方と永仕付統ゝ〳〵ゝ先祖作内

新次郎重信弘作合事

右以人面被宛行実也仍所
以用年中仁拾五貫文宛所
甚沙汰去被作合統蒙恩
去沙汰去雖為何時可有所
改易去也仍補任如件

大永八年戊子六月二日　去日後経去文

仲康

按ずるに大永は後柏原院の年号。同七年後奈良院即位。大永八年いまゝゝ享禄元年なり。一年旧号大永八年ゝ〳〵享禄と改元。將軍足利義晴東猛ゝ里見冠者を傾城の別當ゝ補ゝ〳〵ゝ。室町家れ

附ありて。遊女を傾城といふと大ようる。

○應挙が狸并野馬の話

丸山應挙が狸并野馬の画をそふふるのあり。應挙いまだ嘗野貉の狸たるをえず。ある人これを持て矢芽が老婆あり。薪を負て つゆが挙が家に来る。應挙婆に問。你野猪を知るをえるる婆云山中たまく ある人を視る。挙云你ゆくゆくあるを えびいまくこれを賞さべし婆諾す。一月ばかり あるく。老婆が家のうしろなる竹笠中に野猪来りて外を窺 これをえくたるよりそび京にいたる。挙にあれを告 挙が云你ゆくゆくあるべし。俄頃 酒食をたづさへ門人一両輩を将て矢芽にゆけば野貉 なほ竹中にかくれたり。挙ふたたび筆を採てこれをうつ

婆に謝してその夜家にかへる。その夜これを清画にうつ 又描既にとりおはる時に挙が家に鞍馬にのる老翁あり この翁めづらしく来ぬ挙ところに外猪のるを知りふたり 問て云汝野猪の外たるをえるるか翁云山中住て猪に ある人をえる。挙画ところの外猪をもめてと云。その 画や何翁熟視ていはく云この画よくと云 ゆくべし外猪にあらずと。挙病猪なりといふ。挙ゆどろきて その由を問。翁云。九野猪の最中に眠るや毛髪憤起 四足屈蟠。あたかも病猪ひとしく僕山中にあり病猪を見 たることあり。実にこの画のごとし。挙ちがめて暁て翁に 外猪の形容を問。翁これを説てとそれいづ詳なりとよ あたかく挙さきの画をもてこれを文に外猪を圖とて工夫りつ

賣薪沽酒帰来酔半日
劬労半日閑

そう翁が口傳によれば四五日あるく矣背の老婆来曰。
峯さんはそうしゝ野狐を〻ぞ婆云。あゝ中むぞ〻彼野
狐その結朝竹中に死そう。峯これを聞くいよく翁が草
見を感じ。始てそのかとうれをまつる。一旬ぞうを経て
翁又来ぬ。峯後に國まるところの画幅を見れこれを
見さむ。翁驚歎して云。是其の外狐なりと。峯ふるぶる
そあつく翁に謝す。その画りんとも奇絶なり。今なほ京
師墓の家にあり。峯が画に公をかちみて初めてし。嘯風亭結

亦西定雅の話に。慈峯ゆうしゝ附。野馬の草をさむ
ところを國ぢう。一老翁又そあつく難じて云。これ青馬なり。峯
云。その由如何。翁云。夾馬の草をとりんとするやうそ
ぞそのの目を用これ草に目を傷ふんとをいとぞなり。

この馬蓋中に鼻づとのとなぞ。その両眼爛々紅絳なり。
ちれ青るに目あるぞ。峯ふるくその説を感じ柿
この二翁何人ぞ。野夾ぞも功ちあり。ちれをやらんべし。

○八文字舎自笑が傳　其碩

自笑は京都麩屋町の書肆。八文字屋八左衛門といふ世の人
あり。称く言るところなり。今の八左衛門は即ち四代近者
京を去く大坂安堂寺町に住す。平客中その家を弱
く自笑が傳を問ども詳なるぞ自笑性は安義氏。延享
二年十一月十一日没す。年八十餘。京二條寺町本光寺に墓
あり。この外少傳るなく。自笑が墨跡もたぶくれ
少難ようせく今はなしといふ浪速の友魚橋庵はこれ
京の人なり。彼人の話に甚碩は江戸市井者なりとぞ。大抵

俳を嗤て業とす。此人自笑が俳の相違を聞て一の人なり
さて大仏師世ゝ業絶せずして家富り。其頑愚文学を
自笑が戯俳初学にして利を貪ることなくして其頑も
なりて後悔し且名を好むこころあり。けん後みな自笑其
頑愚俳の初心なりしを出板しけるが。亦その内あり
て自笑と絶交し。其頑その子ふ書林をこせて自俳の
冊子を開く板せしよりあぶふ者なるべして。其頑一俳と
しく出せし冊子ハうれぞ。大よ換をしたるとぞ其頑
が浪華ホいまゝ考ぞ。却つて其頑が才自笑を恐るゝ
ぞ。されどもその名自笑が有ることあるゝぞ。豈ふ幸
ゝあるぞや。吉冷かるたゝ一ふ身多し。或人云自笑を頑
とゝ思くなりてのちを。南岌とゝ人と相違しく装俳勢

しとゝ。今たゝく南岌俳と紀せしなを見ゝ其頑あれ
たるゝ芳ゝ。自笑が戯俳。都の錦。浪花の西鶴を学べり。
曲三味線とゝ冊子ハ色競馬と。栄大門蛮歌と長者機嬢
袋とゝ三部の冊子を撰業して俳ゝ。この人の戯俳の中
曲三味線ゝ。その際の俳を出来ふ出来ハ自笑その子を
殘笑とゝ。これ殘ゝ自笑と号るのをみゝ俳文ゝ。

○ゝゝゝゝだ并せんぞ万歳

羽倉家譜ホ　龍頭太　桓武天皇御宇　荊田氏の祖なり

ゝゝゝゝその一字も絳なぞ。ゝゝゝ橋本ぬの説ゝ
めゝ考ゝ。ゝ京ホ拾び一一の得なり。山城国稲荷山の
ゝの附神輿の先ゝ。ゝ俳面をゝゝとゝの増山の并
その外の俳書ゝ俳家ゝ考ゝ。一説ホ弘法ゝ俳徒田夫の俳

面をかたどりたるものなり。元来礼の時神輿の前ゆくる面を王の鼻と称す。稲荷山のそれをつかうまつるといふ。按ずるに荷田氏ハ田中の社の神職なり。この面龍頭なるが俗なるをもつて名づけたるなるべし。俗面ハ俗面の名を称することその例多し。是龍頭なる俗の俗面なるを疑ひて弘法の作とせるの説あり。「亦美菊茶土卵子の語」ぜんぜ万歳ハ千秋萬歳なり。秋をもつてとなむべし。千寿あるべきのもれ本造のもれるを私例なり。猿舞ハ恒例なるべしといふ。千秋美策。ちくい千秋美策法師といふべし。大和國窪田箸尾乃両村より出。後大和の外ハもあるべき。眠江入楚ハ面。三河美策ハ是又別流なり。唱家を大江定基の作なりとぞ。

蓑笠雨談初編巻之二終